

A児にとってのふさわしい幼稚園生活

多田琴子
(姫路市立豊富幼稚園)

I はじめに

幼稚園教育要領の中で、幼稚園教育の基本として、環境を構成する教師は、幼児にとっての「ふさわしい生活」を「安定した情緒の下で自己を十分発揮することにより」保障いくことが求められている。⁽¹⁾

5歳児は、個人差を考慮しても、自我の形成がある程度なされ、自他認知を繰り返し体験しながら、集団の中の自分をつくりつつある。

しかし、幼児を取り巻く環境は、年々複雑になり、幼児を育てていくには様々に困難な状況がある。一つには、家庭が子どもを育てていく機能を失いかけているため、幼い頃から社会化、集団化を求められる環境へ追い込まれる状況がある。二つ目には、保育所及び幼稚園において、真に「幼児にふさわしい生活」を支える環境の構成がなされていない諸問題がある。三つ目に、防犯的課題により、地域社会の教育力を取り込む手だても講じにくくなり、安心して幼児の生活の場を開放することができにくい現状がある。⁽²⁾

本稿では、園児 20 人の小規模園における、幼児自らが大切にされていると実感できる学級づくりに取り組んでいる実践の中から、A児に焦点をあてて、問題行動をとる幼児にとっての「ふさわしい幼稚園生活」を探りたい。

II 研究の方法

本研究は、兵庫県姫路市立T幼稚園の実践を基に、A児の行動と教師のかかわり、保護者の変容から、問題行動をとるA児にとっての「ふさわしい幼稚園生活」を探る。また、実践を進める中で、担任が選択した手だての矛盾と課題を整理するものである。

1) 実践園の概要

姫路市北部に位置し、1学年、1学級、専任園長1名、担任1名、用務員1名の公立幼稚園

園児数は、男児12名、女児8名、計20名。同一保育所からの16名は、様々な意味において友達関係を築いて入園してきた。また、様々な生活環境の影響を幼児が受けている。

2) A児の背景

○家族構成：父、母、A児、妹（保育所）、父の叔父
○生後1歳半までは主に祖母に養育される。その後保育所に入所、5歳児になり本園に入園。

○夜間は、父親、母親の仕事の関係から、主に父親の叔父と過ごすことが多い。

○園生活に必要な用具等については、送迎時に保護者に声掛けを必要とする。

III 実践の経過

A児の行動の記録より抜粋して、時系列によるA児の行動の把握から析出した「ふさわしい生活」と「矛盾と課題」を（表1）として整理した。詳しい実践事例及び行動の読みとり資料は、当日配布したい。

IV 析出されたA児にとってのふさわしい幼稚園生活

- 1) A児及び他の幼児の感情を言語化して、多角的自己認知を進める。⁽³⁾
- 2) A児が安定して遊べる場を確保する。
- 3) 幼稚園の職員が、どのような場合でも、真剣にA児とかかわっていることをA児自身が認識できるようにする。
- 4) A児と交わした約束を守る。
- 5) トラブル後、A児との話し合いにおいて、行為については規制しても、必ずA児が好きであると伝える。
- 6) A児が集団活動に入らない場合は、待っていることを知らせ、集団に戻ってきたときは、温かく迎える。
- 7) A児が友達や教師のかかわりを受け止めにくい場合も、友達や教師の気持ちを伝え続ける。
- 8) 教師はA児の自己抑制力が引き出されるまで根気よく語りかけ続ける。

V 析出された矛盾と課題

- 1) A児のありのままを受け入れることと、A児の社会化を促すこと。
- 2) A児の行動を、受け入れるべき自己主張とするか、我が儘な行為として制止するか。
- 3) A児に対する担任の手だての妥当性。
- 4) A児の行為を他の幼児に意味づけるとき、他の幼児の自己抑制につながっているかどうか。

<引用・参考文献>

- (1) 文部省、「幼稚園教育要領解説」、p20、フレーベル館、1999
- (2) 多田琴子・田中亨胤「幼児期にふさわしい生活のカリキュラム（第3章）」、pp. 31～32、田中亨胤・中島紀子編著、『幼児期の尊さと教育』、ミネルヴァ書房、2001
- (3) 多田琴子「幼児のふさわしい生活を支える保育」、pp. 122～123、日本保育学会第56大会発表論文集、2003

(表1) 時系列によるA児の行動の把握から析出した「ふさわしい生活」と「矛盾と課題」

月	A児の行動	他児の反応	教師のかかわり	保護者の様子	整理したこと
4	- 自分の気に入らないことがあると、相手を追いかける。 - 大人を独占しようとする。 - 手洗いや歯磨きなどをはじめると、延々と水遊びをする。止めると水を掛けたり追いかけたりする。	なぜA児に追いかけているのか聞くと「A児が悪い」と言う。	- A児を抱き留め、経緯を双方に聞くと同時にそれぞれの思いを代弁して伝える。 「もったいない」と水を止める。(IV-3)	送迎は父の叔父が行い、保護者の養育に対する姿勢が伝わっていない。	気持ちや経緯を言葉に表現できない幼児が多い。(IV-1)
5	- 出席停止で一週間欠席。その後足の骨折でギブスをして登園。A児の遊びの場はブロック遊びを中心とした保育室に偏った。(IV-2) - A児の情緒の比較的安定した日々が続く。	A児が欠席すると、学級全体が落ち着いた雰囲気になった。	- 肯定的に受け止めたA児の姿を保護者に伝える。 - A児の遊びの場が固定したことで、他の幼児一人一人にかかわる時間がもてるようになった。	- 母親の送迎を促すことで、幼稚園での様子を伝えることができるようになる。 - 父親との登園が多くなる。	A児が一人遊びをすると、学級は落ち着くが、A児の社会化は進まない。(V-1)
6	- 自由な遊びの時間は、中学生や他児の母親を独り占めにしながら、電車ごっこをして機嫌良く遊ぶ。 - A児が「嫌なこった、先生の意地悪」を連発。持ち物の始末をしない、水道栓全開、水道のホースで水まき、保育室に入らないで遊ぶ。(IV-6・V-2)	A児が作った段ボールの電車に乗せてもらって遊ぶ。	音楽会に向けて学級活動の時間が多くなると、A児を規制することが多くなった。(IV-6・V-2)	母親から生育歴や家庭環境について話を聞く。	A児は、かかわってくれる大人(トライやるの中学生、他児の母親)に依存することで遊びを継続させる。(IV-2)
7	- 七夕の集いにA児の保護者は欠席。「お母さんまだ？」と待ち続ける。 - プールでは、プールサイドを走ったり飛び込んだりする。	学級活動では、つられてふざける幼児は少なくなった。(V-4)	安全指導をしながらもA児とだけの時間をとる。(IV-5)	「学校で椅子に座れなかったらどうしよう」母親としての不安を口にする。	母親が来なかったことで、自己存在の不確かさをA児は味わっている。
9	- 他児を挑発して水を掛けさせ、掛けたと言って追いかける。 - ブロックを独占使用し、さらに、友達ブロック作品を壊す。	A児の挑発に乗り、からかう幼児がいる。	A児の作ったブロック作品を担当が壊してみせる。(IV-7・V-3)	肯定的に話しかける園長からの励ましや伝達を心地よく受け止める。	教師が選択した手だての妥当性についての矛盾。(V-3)
10	- 祭り御輿の制作を喜び続ける。 - 御輿を担ぐ安全性に欠ける。 - トラブルを「お母さんに言わんといて」と言う。(IV-4)	同じ幼児がA児とのトラブルを起こす。	A児の得意な活動を学級で紹介し、それぞれの幼児のよさを分かち合う場をもつ。	PTA 清掃に父親が参加する。	A児なりに自分の行為を、いけない行為だと認識している。(IV-5)
11	学級活動において、興味のない活動や、できないと感じた活動には参加しない。(V-2)	A児の行動に左右される幼児が少なくなった。	無理には学級活動に誘わず、体験させたい活動は個別指導をする。	母親の子育てに対する気持ちが行動に現れ始める。	A児の行動と教師のかかわりを学級の幼児は見ている。(V-4)
12	友達を交えてトラブルの話し合いをし、自分の言い分を言い、友達の言い分を聞くことができた。	言葉で経緯や気持ちを話せるようになってきた。	A児とトラブルを起こす幼児の自己抑制力を促す。	父親から連絡帳に便りが届く。	語り続けることの重要性。(IV-8)
1	我慢できなくなって友達を追いかけると、担任に怒っている様子を見せに来る。	なぜA児が怒るのか、理解しはじめた。	A児の気持ちを受け止め、抱きしめる。	夫婦揃って個人懇談会に来る。	A児をまるごと受け入れることの重要性。(IV-5)